

# 國學院大學學術情報リポジトリ

〔書評〕 種稻秀司著 『幣原喜重郎(人物叢書)』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西田, 敏宏, Nishida, Toshihiro メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000676">https://doi.org/10.57529/00000676</a>

〔書評〕

種稻秀司著

『幣原喜重郎（人物叢書）』

西田敏宏

本書は、戦前に外相、戦後に首相を務めた外交官・政治家、幣原喜重郎（一八七二～一九五一年）の評伝である。一次史料の広範な調査・分析に基づく学術的な幣原の評伝としては、すでに服部龍二氏による『幣原喜重郎と二十世紀の日本―外交と民主主義』（有斐閣、二〇〇六年）がある（同書はその後、『増補版 幣原喜重郎―外交と民主主義』吉田書店、二〇一七年として再刊）。本書は、ほぼ同時期に刊行された熊本史雄氏の『幣原喜重郎（中公新書）』（中央公論新社）とともに、幣原喜重郎研究をさらに深化させるものといえる。

まず、本書の内容をその構成に沿って紹介したい。最初に「はしがき」で、幣原については、平和主義者というイメージだけが先行して、その実像は明らかになっていないと

指摘される。そこで、最新の研究成果と広範な史料調査により、幣原の実像に迫るとする。

第一章・第二章では、幣原の小学校～大学の学業と駆け出しの外交官時代、そして家族関係のことがまとめられている。幣原は、三菱財閥の岩崎家の娘と結婚したが、職務では門閥や縁故に左右されることなく、勤勉で公正であろうとしたという。

第三章では、幣原の外交官修業時代と、外務次官、駐米大使時代の働きが跡づけられる。第一次世界大戦中～大戦後には、幣原は外務次官として外務省内で影響力を伸ばした。外務省では、中国への干渉政策の傾向が強い「中国通」が主流から外れる一方、「国際法に強い幣原型」や「通商畑の知米派」が重用されるようになる。第一次世界大戦後には、幣原は駐米大使、さらにワシントン会議全権として、新外交に呼応する姿勢を示し、平和主義をアピールするようになる。ただし幣原は、満蒙權益の擁護に努めるなど、あくまで国益第一の現実主義に基づいて行動し、そこには二面性があったとされる。

第四章では、第一次幣原外交の展開と、加えて田中外交に対する幣原の姿勢が検討される。幣原外交は中国内政不干涉政策をアピールする一方で、国際的に認められる範囲で満蒙權益擁護の手段を尽くした。中国のナショナリズムの高揚に対しては、

幣原外交はその穩健化を促すべく、一貫性と一定の融通性をもつて、また中国の政治情勢の冷静な分析に基づいて対応した。

幣原の実像は、理想主義的な平和主義者というイメージとは異なり、現実主義者だったとされる。国際連盟政策でも、先述の二面性が見られた。一方、田中外交に対しては、幣原は批判を展開したものの、政党内の政争とは一線を画したと評価される。

第五章では、満州事変への対応を中心に、第二次幣原外交の展開が検討される。ロンドン海軍軍縮条約締結の政治問題化、さらに満蒙問題の浮上で、幣原外交に対する国内の支持は低下していく。ただし外務省内では、幣原は主要ポストを自ら信賴する部下で固めた。前章と合わせて、二度の外相期を通じ、先述の幣原型や知米派が重用されたと指摘される。満州事変に際しては、幣原は陸軍の強硬論に譲歩を余儀なくされながら、国際連盟やアメリカとの間で妥協点を見出そうと努力した。それは幣原の国際的名声があればこそのことだったという。

第六章では、外相退任後から太平洋戦争敗戦までの幣原の在野時代が跡づけられる。幣原はこの時期、隠遁生活を送ったわけではなく、英米派・和平派として活動する吉田茂などからしばしば外交問題に関する助力や提言を求められ、それに応じたことが明らかにされている。

第七章では、戦後の新憲法制定過程を中心に、幣原の首相時代が描かれる。幣原は、神話的要素を含む旧来の天皇制を守ろうとした。だが、人民主権・象徴天皇制を打ち出すGHQの新憲法草案に直面して、幣原は天皇制を何とか維持するためにやむなくそれを受け入れた。憲法九条幣原発案説については、幣原が考えたのは、対外的アピール戦術として戦争放棄の声明を行うことに過ぎないとして、明確に否定される。なお、次章と合わせて、幣原は旧政府・軍指導者の戦争責任の追及に否定的で、東京裁判にも非協力的だったと指摘される。

第八章では、晩年の幣原の政治活動が検討される。幣原は旧来の伝統的価値観を擁護し、保守派として中道派や革新勢力と対立した。講和問題に関しては、幣原は表向きの平和主義アピールの一方で、日本の安全保障を現実主義的に考え、多数講和や米軍の日本駐留を支持した。ただし幣原は、講和問題が政争の具となる事態を懸念し、与野党の対話と協力を目指す超党派外交を推進した。他方この時期に、憲法九条幣原発案説がGHQによって創作され、幣原は大局的見地からそれに従わざるを得なかったとの推論が示される。

第九章は、最後のまとめである。第一に幣原は、国際法畑のキャリアから、国際協調主義・平和主義の理想に共鳴した。そ

の一方で第二に、幣原の外交指導者・政治家としての政策・行動は、理念先行ではなく、一貫して現実主義に基づくものだった。そして第三に、幣原はつねに国家本位で物事を考え、生涯を通して国家のために尽くしたと結論される。

次に、本書の評価に関して若干の卑見を述べたい。

本書の最大の長は、最近公開された原史料や対象時期が長期にわたる新聞資料を含めて、国内の史料を博搜している点にある。また、特に外交史料については、書き込みや修正、電報の発着時間に着目するなど、精緻な分析を行っている。本書には、これらの史料の写真が多数掲載されており、著者のこだわりが感じられる。なお海外の史料については、中国などの公刊史料が少し使われているものの、全体としては限定的な活用にとどまっている。

このような国内史料の博搜・精査の成果として第一に、本書は評伝として、幣原の人物像を描き出すことに一定程度成功している。口絵で「公直無私」という幣原の書が、「幣原らしい言葉」として紹介されているのは非常に印象的である。本書では幣原の生涯に関して、興味深い事実が明らかにされている点も少なくない。また関連史料が限られる中で、妻子をはじめとする家族との関係が取り上げられているのも評価される。

第二の成果として本書は、日本近現代史（日本政治外交史）研究においても重要な貢献を含んでいる。とりわけ満州事変時の外交過程と、戦後の新憲法制定過程については緻密な分析が行われており、それぞれ興味深い論点が指摘されている。また、憲法九条幣原発案説がいつどのようにして生まれたのかについても、掘り下げた分析が展開されている。

一方、本書で気になった点も指摘しておく。本書では、幣原の外交指導や政治活動がしばしば詳細に検討される一方で、それらを取り巻く全体的な枠組みが十分に明示されていない。幣原外交についていえば、第一次世界大戦後の東アジアの国際関係や日本外交がどのように展開していったのかに関する体系的な説明が、ほとんどなされていない。同様に戦後の幣原の政治活動についても、その前提となる占領期の日本政治の全体的な構図や流れが、整理して示されていない。そのために、幣原の外交指導や政治活動が、こうした全体的な枠組みの中に位置づけて論じられていない。その結果、それらにおける個々の政策や行動が、それぞれ全体の流れの中でどのような意味や重要性をもち、またどれほどの妥当性を有するものだったのか、明確になつていないように思われる。

それはまた、幣原の外交指導や政治活動の全体像が、明瞭に

描き出されていないことを意味する。本書では、幣原の外交指導や政治活動について、一貫して現実主義に基づくものだったといささか一本調子に総括されている。また幣原が、平和主義をアピールする戦術を活用したことが強調されている。しかしながら、理想を言えば、幣原の外交指導や政治活動の全体像を捉えた上で、もう少し深いレベルでそれらの特質や根底にある考え方、さらには時期による変化を明らかにすることが求められるのではないだろうか。

以上はあくまで個人的見解であり、さらに評者自身が幣原外交の研究に従事するためバイアスがかかっている可能性もある。ぜひ本書を自ら手に取って一読することをお勧めしたい。

（四六判、三五二頁、吉川弘文館、二〇二一年三月発行、定価二四〇〇円＋税）